三島由紀夫
全集

10

三島由紀夫全集

10

X

監修／石川淳　川端康成　中村光夫　武田泰淳
編纂／佐伯彰一　ドナルド・キーン　村松剛　田中美代子

新潮社

三島由紀夫全集第十巻
昭和四十八年四月二十日印刷
昭和四十八年四月二十五日発行
著者三島由紀夫
発行者佐藤亮一
装幀者杉山寧

発行所株式会社新潮社
〒162東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇—一一一一　振替東京八〇八
定価二五〇〇円
第一回配本（全35巻・補巻1）
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
Copyright © 1973 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集　第十巻　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

金閣寺……七
十九歳……二七五
施餓鬼舟……二九三
橋づくし……三〇九
女方……三三三
美徳のよろめき……三六三
貴顯……五二一
百萬圓煎餅……五四三
スタア……五六五
解題……六二九
校訂……六三五

三島由紀夫全集　第十巻　小説(10)

金閣寺

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた。

私の生れたのは、舞鶴から東北の、日本海へ突き出たうらさびしい岬である。父の故郷はそこではなく、舞鶴東郊の志樂である。懇望されて、僧籍に入り、邊鄙な岬の寺の住職になり、その地で妻をもらつて、私といふ子を設けた。

成生岬の寺の近くには、適當な中學校がなかつた。やがて私は父母の膝下を離れ、父の故郷の叔父の家に預けられ、そこから東舞鶴中學校へ徒歩で通つた。

父の故郷は、光りのおびただしい土地であつた。しかし一年のうち、十一月十二月のころには、たとへ雲一つないやうに見える快晴の日にも、一日に四五へんも時雨が渡つた。私の變りやすい心情は、この土地で養はれたものではないかと思はれる。

五月の夕方など、學校からかへつて、叔父の家の二階の勉強部屋から、むかうの小山を見る。若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に、金屏風を建てたやうに見える。それを見ると私は、金

閣を想像した。

寫眞や教科書で、現實の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語つた金閣の幻のはうが勝を制した。父は決して現實の金閣が、金色にかがやいてゐるなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた。

遠い田の面が日にきらめいてゐるのを見たりすれば、それを見えざる金閣の投影だと思つた。福井縣とこちら京都府の國堺をなす吉坂峠は、丁度眞東に當つてゐる。その峠のあたりから日が昇る。現實の京都とは反對の方角であるのに、私は山あひの朝陽の中から、金閣が朝空へ聳えてゐるのを見た。

かういふ風に、金閣はいたるところに現はれ、しかもそれが現實に見えない點では、この土地における海とよく似てゐた。舞鶴灣は志樂村の西方一里半に位置してゐたが、海は山に遮ぎられて見えなかつた。しかしこの土地には、いつも海の豫感のやうなものが漂つてゐた。風にも時折海の匂ひが嗅がれ、海が時化ると、澤山の鷗がのがれてきて、そこらの田に下りた。

體も弱く、駈足をしても鐵棒をやつても人に負ける上に、生來の吃りが、ますます私を引込思案にした。そしてみんなが、私をお寺の子だと知つてゐた。惡童たちは、吃りの坊主が吃りながらお經を讀む眞似をしてからかつた。講談の中に、吃りの岡つ引の出てくるのがあつて、さういふところをわざと聲を出して、私に讀んできかせたりした。

吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障碍を置いた。最初の音がうまく出ない。その最初の音が、私の内界と外界との間の扉の鍵のやうなものであるのに、鍵がうまくあいたためしがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、内界と外界との間の戸をあけつぱなしにして、風とほしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしてもできない。鍵が錆びついてしまつてゐるのである。

吃りが、最初の音を發するために焦りにあせつてゐるあひだ、彼は内界の濃密な黐から身を引き離さうとじたばたしてゐる小鳥にも似てゐる。やつと身を引き離したときには、もう遲い。なるほど外界の現實は、私がじたばたしてゐるあひだ、手を休めて待つてゐてくれるやうに思はれる場合もある。しかし待つてゐてくれる現實はもう新鮮な現實ではない。私が手間をかけてやつと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に變色し、ずれてしまつた、……さうしてそれだけが私にふさはしく思はれる、鮮度の落ちた現實、半ば腐臭を放つ現實が、横たはつてゐるばかりであつた。

かういふ少年は、たやすく想像されるやうに、二種類の相反した權力意志を抱くやうになる。私は歴史における暴君の記述が好きであつた。吃りで、無口な暴君で私があれば、家來どもは私の顔色をうかがつて、ひねもすおびえて暮らすことになるであらう。私は明確な、辷りのよい言葉で、私の殘虐を正當化する必要なんかないのだ。私の無言だけが、あらゆる殘虐を正當化するのだ。かうして日頃私をさげすむ教師や學友を、片つぱしから處刑する空想をたのしむ一方、私はまた内面世界の王者、靜かな諦觀にみちた大藝術家になる空想をもたのしんだ。外見こそ貧し

かつたが、私の内界は誰よりも、かうして富んだ。何か拭ひがたい負け目を持つた少年が、自分はひそかに選ばれた者だ、と考へるのは、當然ではあるまいか。この世のどこかに、まだ私自身の知らない使命が私を待つてゐるやうな氣がしてゐた。

……こんな一插話が思ひ出される。

東舞鶴中學校は、ひろいグラウンドを控へ、のびやかな山々にかこまれた、新式の明るい校舍であつた。

五月のある日、中學の先輩の、舞鶴海軍機關學校の一生徒が、休暇をもらつて、母校へあそびに來た。

彼はよく日に灼け、目深にかぶつた制帽の庇から秀でた鼻梁をのぞかせ、頭から爪先まで、若い英雄そのものであつた。後輩たちを前にして、つらい規律づくめの生活を語つた。しかもそのみじめな筈の生活を、豪奢な、贅澤づくめの生活を語るやうな口調で語つたのである。一擧手一投足が誇りにみちあふれ、そんな若さで、自分の謙讓さの重みをちやんと知つてゐた。彼はその制服の蛇腹の胸を、海風を切つて進む船首像の胸のやうに張つてゐた。

彼はグラウンドへ下りる二三段の大谷石の石段に腰を下ろしてゐた。そのまはりには、話に聽き惚れてゐる四五人の後輩がをり、五月の花々、チューリップ、スキートピイ、アネモネ、雛罌粟、などが斜面の花圃に咲きそろつてゐた。そして頭上には、朴の木が、白いゆたかな大輪の花をつけてゐた。

話者と聽手たちは、何かの記念像のやうに動かなかつた。私はといへば、二米ほどの距離を置いて、グラウンドのベンチに一人で腰掛けてゐた。これが私の禮儀なのだ。五月の花々や、誇りにみちた制服や、明るい笑ひ聲などに對する私の禮儀なのだ。

さて、若い英雄は、その崇拜者たちよりも、よけい私のはうを氣にしてゐた。私だけが威風になびかぬやうに見え、さう思ふことが彼の誇りを傷つけた。彼は私の名をみんなにきいた。それから、

「おい、溝口」

と、初對面の私に呼びかけた。私はだまつたまま、まじまじと彼を見つめた。私に向けられた彼の笑ひには、權力者の媚びに似たものがあつた。

「何とか返事せんのか。啞か、貴樣は」

「ど、ど、ど、吃りなんです」

と崇拜者の一人が私の代りに答へ、みんなが身を撚つて笑つた。嘲笑といふものは何と眩しいものだらう。私には、同級の少年たちの、少年期特有の殘酷な笑ひが、光りのはじける葉叢(はむら)のやうに、燦然として見えるのである。

「何だ、吃りか。貴樣も海機へ入らんか。吃りなんか、一日で叩き直してやるぞ」

私はどうしてだか、咄嗟に明瞭な返事をした。言葉はすらすらと流れ、意志とかかはりなく、あつといふ間(ま)に出た。

「入りません。僕は坊主になるんです」

皆はしんとした。若い英雄はうつむいて、そこらの草の莖を摘んで、口にくはへた。

「ふうん、そんならあと何年かで、俺も貴様の厄介になるわけだな」

その年はすでに太平洋戰爭がはじまつてゐた。

……このとき私に、たしかに一つの自覺が生じたのである。暗い世界に大手をひろげて待つてゐること。やがては、五月の花も、制服も、意地惡な級友たちも、私のひろげてゐる手の中へ入つてくること。自分が世界を、底邊で引きしぼつて、つかまへてゐるといふ自覺を持つこと。……しかしかういふ自覺は、少年の誇りとなるには重すぎた。

誇りはもつと輕く、明るく、よく目に見え、燦然としてゐなければならなかつた。目に見えるものがほしい。誰の目にも見えて、それが私の誇りとなるやうなものがほしい。例へば、彼の腰に吊つてゐる短劍は正にさういふものだ。

中學生みんなが憧れてゐる短劍は、實に美しい裝飾だつた。海兵の生徒はその短劍でこつそり鉛筆を削るなんぞと言はれてゐたが、さういふ莊嚴な象徵をわざと日常些末の用途に使ふとは、何と伊達なことだらう。

たまたま、機關學校の制服は、脫ぎすてられて、白いペンキ塗りの柵にかけられてゐた。ズボンも、白い下着のシャツも。……それらは花々の眞近で、汗ばんだ若者の肌の匂ひを放つてゐた。蜜蜂がまちがへて、この白くかがやいてゐるシャツの花に羽根を休めた。金モールに飾られた制帽は、柵のひとつに、彼の頭にあつたと同じやうに、正しく、目深に、かかつてゐた。彼は後輩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com